



～登校するのが楽しいと思える学校を目指して～

学校だより



令和6年12月20日発行
第4号

札幌市立白石中学校
発行責任者 小関高宏

第55回白石区中学生の主張発表会



本校より2名の生徒が代表として発表を行いました。2年4組の■■■■さんは敢闘賞、3年3組の■■■■■さんは見事、優秀賞を受賞し、白石区の代表として宮城県白石市で発表を行いました。

【3年3組 ■■■■■】「本物の宝物」



自分の中にある、心から大切にしている「宝物」にみなさんは、どんな思い入れがありますか。私は、これまで「結果がすべて」という言葉に共感し、信じ続けてきました。しかし、今ではその言葉に反するほど私には伝えたいことがあるのです。

私は、幼い頃から何事にも興味津々で、様々なことに関心が溢れていました。色々なことに挑戦していた小学校時代。その頃、私の友人たちは、美容師を目指したい、警察官、看護師になりたいなどの夢や大切なものを見つけていました。しかし私は、自分の心を動かすようなものにはなかなか出会うことができませんでした。

小学六年生へと進級した頃、テレビでバレーボール日本代表の試合を観ました。その時に私の目に留まった「バレーボール」という競技、オレンジ色の床にボールが落ちそうで落ちない、ボールタッチに重力を感じさせない選手たちがまるで魔法使いのようにも見えました。生まれて初めてやってみたいと強く思いました。

待ち遠しかった中学一年生の春、やっとの思いで入った部活動、バレーボール部。私は一目散に体育館へかけつけました。初めてそれらを目の当たりにしたとき、一気に私の見る世界が一変し、明るい色が数々と浮き出てくるように鮮やかに彩りをみせたのです。「やっと見つけた・・・！」自分が探し続けていたもの、私の心は瞬く間に驚掴みにされていました。そうして、バレーボールが私にとって「宝物」となったのです。これが、私が追い求めた最初の「結果」なのだ、そう思いました。それだけではなく、この出会いは私に大切な考えを教えてくれました。私が小学生の頃からずっと自分の中の大切なものを探し続けていたという、『宝物を見つけるまでの思いと過程があったからこそ、このような「結果」が生まれたのだ。』とそう思いました。

全てが順調だと思っていました。しかし、今までただただ楽しかったバレーボールは、時間が経つにつれ、「楽しい」という感情から少しずつ本気が変わっていくのを自覚していきました。自分が大切にしていた大切な宝物。それは「楽しい」だけでなく、「強くなること」が必要だと考えるようになり、「悔しい」、「嫉妬」、「焦り」。いくつもの感情が渦になって、私を包んでいきました。いつしか、私の心には大きな「競争心」が芽生えました。私が、ようやく見つけた「宝物」の輝きや彩りが消えていってしまう。だんだんとバレーボールに対する思いが変わってしまうのを恐れて、「やめたい。」「逃げてしまいたい。」そう思うようになりました。何度も挫折を味わい、自分らしさを失ってしまったバレーボールを続けていくことは、とても苦しく、自分にはできないと諦めていました。しかし、自分の心を動かしたあの日から、私が大切にしてきた「宝物」への思いは、そう簡単に私からバレーボールを手放してはくれませんでした。私が歩んできた今までの過程が、私のことを繋ぎ留めてくれたのです。この出来事をきっかけに、「結果がすべて」という言葉の裏腹に、「結果にたどりつくまでの過程と思い」がいつか自分の心を動かすきっかけになると私は気がきました。「たくさんの思い、そして宝物を見つけるからのこまでの過程」こそ、最も大切だと強く思ったのです。

今もなお、困難や多くの不安を抱えながらこれからの進路と真剣に向き合わなくてはなりません。私がまだバレーボールを「手離したくない。」そう思うのはきっと、今まで数多くの「思い」をのせた「過程」があるからだと思います。もし、また立ち止まってしまったとき、私は「過程」を振り返り、自分の手で見つけた宝物への「思い」に「大丈夫。」と声をかけるでしょう。みなさんも、自分の歩んでいく道に迷いが訪れることがあると思います。その時に、先を見据えて未来と向き合っていくことも大切ですが、「結果」が求められるこの時代に、後ろを振り返って、自分が歩んできた「過程」、そして「思い」を大切にすることを忘れないでください。





【2年4組 ■■■】「嘘を見破る」

「この課題は順調だよ」

「こっちは終わらせてしまったよ」



これらは休みの日についてしまう嘘です。どうしても勉強しているときにゲームやテレビの誘惑に勝てません。嘘は少し考えるだけで出てきます。そして今のことを気にせず、未来の自分に任せてしまうことができるのです。何も考えずに今を楽しめるのです。他にも「嘘」は自分を隠し、偽ることができます。キャラを作ることや、感じたことと違う表情を作り出すことなど、様々なことができます。

過去に道徳の授業で、「嘘」について取り扱う機会が何度かありました。その中で、「良い嘘」と「悪い嘘」があるという内容のものが、「良い嘘」は相手をかばう嘘、「悪い嘘」は相手を陥れる嘘だと学びました。そこで私は、「良い嘘」と、「悪い嘘」について考えるとともに、どんな「良い嘘」をついたことがあるのかを思い出してみることにしました。そうすると私は二通りの良い嘘をついていることが分かりました。

まず一つ目は、私が保育園に通っていた頃に泣いている子を見かけたときについた嘘です。

「涙が枯れてしまうよ。そうすると嬉しいときも悲しいときも泣けなくなってしまうんだよ。」

少し気恥ずかしいですが、私が幼い頃に相手を慰めようと頑張った嘘です。このような嘘は、相手の気持ちを察して助けようとする良い嘘だと思います。そして私はこの嘘をついてもらったときもあります。そんなときは、嘘だとわかっていても、本当だと思い込む他ありません。

もう一つは、何かを教えるときの嘘です。誰かに何かを教えるとき、なんでこんなこともできないんだというイライラした心の声を抑えて、「いいね。ここはこうの方がいいじゃない。」と言い、「違う」という直接的な指摘をせずに、アドバイスをいれて教えます。これは嘘らしくないように聞こえますが、相手にではなく自分の心に嘘をつくことで、自分の言葉を柔らかくし、人間関係を円滑にします。私自身、命令口調で言われるとあまり従いたくないと感じます。それはきっと共感することが足りないからかもしれません。

このように嘘は悪い面だけでなく使い方によっては良い面を見せます。「良い嘘」だけを紹介すると、「良い嘘」は良い面だけをもっているように感じます。しかし「良い嘘」は、良い面だけをもっているのでしょうか。「良い嘘」ならたくさんついても良いのでしょうか。

いいえ、そうではありません。「良い嘘」もつき過ぎると信用されなくなってしまいます。何にでも「いいね」と評価する人の評価を私は信じることはできません。いわゆる「お世辞」です。初めは嬉しく思っている、その人が言っていることが嘘だと分かると別の場面で言っていたことも嘘だったのではと疑問を抱いてしまいます。これは初め良い嘘だったものが悪い嘘になってしまう例です。ときには、真実を伝えていても嘘に思われてしまいます。

また、他に簡単には「良い嘘」とも「悪い嘘」とも言い切れないものがあります。その例の一つが「大丈夫」です。やせ我慢から「大丈夫」と言った経験が誰もあるのではないのでしょうか。周りの人を安心させる優しい良い嘘と言えますが、いじめにあい、心配されることを恐れ、自分を押し殺してつく「大丈夫」という嘘は、最終的には、自分も、ついた相手も傷つけてしまう「悲しい嘘」になってしまうのです。

このように嘘は状況によって、たくさんの種類があり、いくつもの側面をもつことがわかりました。これらのことから、私は、生きてく上で大切な力があると考えました。まず、「嘘を知り、嘘を見破る力」です。嘘のレパートリーを知ること、自分や相手をごまかそうとする「悪い嘘」を見抜くことができ、だまされずに済みます。誰かの「悲しい嘘」に気付くことができれば、声をかけ、誰かを救うことさえできるのです。また「良い嘘」を適切に使うことができれば、人間関係は円滑になり、真っ直ぐに真実を言い合える関係を作ることだってできるのです。そして、「嘘を見破る力」と共に、最も大切なのは、「相手を慮る力」です。どのような状況で嘘をついたのか、それを慮る力があってこそ、嘘を見抜く力は、優しい力として働くのではないのでしょうか。「嘘」を見破り、非難するだけの人間ではなく、嘘の裏側を知ろうとする思いやりをもつ人間が増えていくことが社会には必要なのではないのでしょうか。

